

熊本県知事 蒲島郁夫様

2020年10月20日

日本共産党熊本県委員会

委員長 松岡勝

県議会議員 山本伸裕

日本共産党南部地区委員会

委員長 野中重男

## 被災者・流域住民を主役にした球磨川治水検証と対策を

球磨川豪雨検証、治水対策について、以下要請と質問をいたします。

### 1、データをすべて開示し、科学的客観的な流量の検証を

①「球磨川豪雨検証委員会」(以下「検証委」)での国土交通省による流量の推定については、河川工学の専門家の試算との違いがあります。この点については、すでに指摘しています。また市民団体等からの具体的な指摘がなされています。

治水検証の根本の流量が違えばおのずと、国交省が示す「川辺川ダムが存在した場合の効果」も異なります。あらためて科学的客観的な流量の検証を求めます。

②「検証委」での国交省の説明によると人吉地点(62・17km)の流量の推定(実績再現ピーク流量)は、約7,000 $\text{m}^3/\text{s}$ (氾濫戻しピーク流量7,400 $\text{m}^3/\text{s}$ )、ピーク水位は、6・9m～7・6m程度(痕跡水位より)となっています。ところが、国交省の平成18年(2006年)第46回河川整備基本方針検討小委員会資料・「歴史的洪水の痕跡水位を基にした洪水ピーク流量の推定・球磨川水系」によると、寛文9年洪水(1669年)の場合、人吉観測所水位に換算すると洪水水位6.54mで推定流量約8,200 $\text{m}^3/\text{s}$ 。正徳2年(1712年)洪水では、洪水水位6.84mで推定流量8,900 $\text{m}^3/\text{s}$ となっています。(別紙-1)

今回の洪水の人吉観測所痕跡水位7・6mで換算すれば流量は10,600 $\text{m}^3/\text{s}$ になり、川辺川ダムのカット量2,600 $\text{m}^3/\text{s}$ を差し引いてもピーク流量は8,000 $\text{m}^3/\text{s}$ になります。効果量算定の最も基本となる流量の算定において、なぜ、基本方針決定時に採用した水位と流量の関係式を採用しないのか説明を求めます。

③今回の流量や効果量の算定に使用した一連のデータおよび解析資料等をすべて公開すること。また、熊本県が主催して、国交省の示した「検証結果」に異を唱える専門家らも含めた第三者による「検証の場」を設けることを求めます

④現時点で科学的客観的には疑義がある国交省による「結論」(人吉のピーク流量、川辺川ダムの効果一浸水範囲が6割減少)を「住民の皆様のご意見・ご提案をお聴きする会」(以下、「聞く会」)で熊本県が説明することは、あまりにも公平性を欠くものであり直ちに改めることを求めます。

## 2、流域住民の安全・安心のための復旧にあたって

被災した住民・地域から、「橋の架け替えを急いでほしい」「堤防(道路)をかさ上げしてほしい」「たまった土砂の撤去、掘削をしてほしい」等の声、要望が寄せられています。こうした切実で、当然の声・要求に国交省・県は、急いで応えるべきです。

その際、橋の架け替え・堤防(道路)の高さ、掘削などで、「今回の洪水水位」以上とすることを求めます。

## 3、特別養護施設「千寿園」被災の検証

①14人の死者を出した球磨村渡の特養施設「千寿園」の被災を受け、国交省と厚労省は対応を検証する検討会を開いています。しかし、一般的な避難計画や異常時の対応状況を検証するだけでは不十分です。

施設関係者の「まさか、こんなことになるとは思っていなかった」との発言がありますが、国交省から、導流堤の設置で小川(支川)の水位を1メートル下げ、浸水被害を防ぐ、排水ポンプができて内水被害に対応できるなどの説明なされており、無理からぬことです。

重大なことは、千寿園は、球磨川水系水害浸水想定区域図・計画規模版(国交省公表)で、浸水区域から外れたままになっていたことです。河川管理者であり、球磨川水系タイムラインを主導した国交省の責任が問われます。(別紙-2)

②導流堤については、河川工学の専門家から、その逆効果が指摘されていました。支川の出口に人為的に壁(導流堤)をつくったことが、小川の氾濫、球磨川からのバックウオーター被害を拡大したのではないかと。球磨川本川側の水位上昇の要因になったのではないかなどの疑問があります。

時間経過ごとの水位上昇、バックウオーターの発生、氾濫、浸水の広がりや導流堤の影響についての検証も必要です。

導流堤についての検証は、この施設が洪水対策(特に計画高水位以上)に対して効果があるのか、阻害要因となっているのかを明らかにする必要があります。阻害要因になっていたら撤去しなければならない問題であり、来年の雨季に備えて確認すべき喫緊の課題です。

県としてどう対処されますか。

③JR付近の道路が低いまま放置されていたことが、千寿園を含む地区全体の浸水被害を早め、広げたとの指摘があります。危険な状態が改善されず放置されてきたことの責任と「なぜそうなったのか」の検証を求めます。

## 4、ダム事業の費用対効果について

今回の洪水で球磨川下流八代市内(概ね遙拝堰から下流)については、萩原水位観測所でHWLに達することなく12,000m<sup>3</sup>/s以上が流下しています。

球磨川河川整備基本方針(1/100)の流量が約10,000m<sup>3</sup>/sですから、川辺川ダムがなくても、計画をはるかに上回る洪水であっても安全に流れるだけの流下能力を備えていることが証明されました。

このことは、八代市街部については、川辺川ダムの効用は不要であることを示しています。ダムの事業評価にあたっては、費用対効果(B/C) > 1.0であることが求

められますが、効果の半分以上を占める八代市街部でダムが不要となるため、(B/C)が1.0を大きく下回ることは明らかです。そこで、あらためて、「(B/C)が1.0を下回る場合はダム事業はできない」ことを指摘します。

県として、どのようにとらえているのか、明らかにしていただきたい。

#### 5、「検証委」「聞く会」と熊本県のあり方

①「川辺川ダム住民討論集会」では、川辺川ダムへの賛否双方の代表による事前協議を行い、開催日時、場所、提出する資料等を協議・確認していました。

「聞く会」の運営においては、被災者・流域住民・流域の諸団体が、ダム案(川辺川ダムを含む治水案)、非ダム案(川辺川ダムなし治水案)について考え、判断することができるような公平な運営、公平な資料の提出に心がけることを求めます。

②「検証委」ではなされなかった市房ダムの緊急放流、川辺川ダムができていた場合の緊急放流、瀬戸石ダムによるダム上流・下流の洪水被害、ソフト面での対策の遅れと被害一等の検証を行い、それらを被災者・流域住民に明らかにすることを求めます。

以上の点についての見解および回答を、10月末日までいただけるようお願いいたします。